

いくつもの声

ガヤトリ・チャクラヴォルティ・スピヴァク

天候のコントロールが不能であるがゆえにアメリカ合州国の東海岸ではますます天気が不順になっていると考えられています。今回も飛行機が大雪のため留め置かれたために、この重要な会合への私の到着も遅れてしまいました。これも倫理的なものが私たちの世界の住環境に対処できていないことの証拠でしょう。それを思うと改めて、京都賞が科学と技術と精神的な活動を共に顕彰することに敬意を表せざるを得ません。

まず先に話されたお二人と私自身の間に心の橋、魂の架け橋を二つかけることから始めたいと思います。サザランド博士は「仕事の中には魂がこもっている、でも結果は私の把握できないところにある」と述べられました。また大隅博士は「今日重視されるのは結果、すなわち効率、すなわち速度だ。しかしながら知的探求にはそれ自身の時間と空間が必要である」とおっしゃられました。

どうぞ聴衆の皆様には、これらの言葉からの反響を以下の私の話のうちに聞いていただきますようお願いいたします。

私たちが語っている時、本当に語っているのはいったい誰なのでしょう？ 科学者であろうと芸術家であろうと、教育の程度にかかわらず、私たちが語る時、そこで語られているのは私たちの歴史にほかなりません。そして私たちは自分ではそうした歴史のごく一部分しか図に示すことはできないのです。今日ここで私が行うのはそのような図解の試みです。そうすることで、光栄にも受賞させていただいたこの京都賞を私にくださることで、私をこれまで創りあげてくれた、とてもここでは数えきれないほど多くの人たちにも賞をくださっている、その事実を改めて皆様と共有したいと思います。

最近になって学んだことですが、アフリカの多くの国で教育程度の高い人々が話す母語は、19世紀にヨーロッパから来た宣教師たちによって体系化されたものとは異なるそうです。人々はいまだにそのような言語を使って同じ母語を共有する人たちとコミュニケーションしているらしいのです。実際、そうした文法が整序されていない母語の系譜をたどっていくと、時にアフリカの東海岸から南部までそれがずっと広がっているということです。おそらくそうした言語の道は、私たちが思いも及ばないほどたくさんあるのでしょう。そしてこれらの言語を「絶滅の危機に瀕している」と呼ぶこと自体、いかにそうした言語が驚くべきサバイバルの歴史を経てきたかを認めていない言い方ではないでしょうか。また「伝統的な」言語と呼んでしまうことも、それらが何世紀にもわたって移動と変革を繰り返してきた事実に

そぐわない名称です。実際、そうした言語が貧しい共同体の中だけで話されていると考えてしまうと、いかにこうした多くの「近代化された」人々がこれらの言語を自分から進んで使用し、それがまた選挙の投票にも使われているという事実が見えなくなってしまいます。言い換えれば、こうした諸言語は、他でもない近代の民主主義と共に存在しているものなのです。これらの諸言語は、いまだ辿られていない歴史の集積庫なのだ、これが私の学んできたことです。こうした無限の宝庫についてアフリカ出身の、そして他の同僚たちと共に考えること、それが今日ここでの私の話の源泉になっています。

ですから、私の人生において助けてくれた人々に思いを馳せる時、私はそうした人たちの背後にある様々な歴史についても考えたい。それはそのような歴史を表面上は作ってきたように見える公式の歴史の陰にある隠された歴史なのですが。このことを踏まえながら、私はこれからここで言葉を紡いでいきたいと思います。ここでの私の考えの基となっているのは、あらゆる要請の前提として無条件に倫理的なものがあり、民主主義とは判断力の訓練に基づいた政治的力学のことである、そのような理解です。

私の両親は、他人のことを考えるような人間に私を育てただけではありませんでした。両親は自分たちで模範を示すことによって、他者への配慮が私自身の一部、私たちの「魂」となるよう育ててくれたのです。ここで言う「魂」とは、私たちの思考や感情や想像、身体の成り立ちさえも形作っている何かのことです。

1947年に大英帝国からインドが独立した際に起きた分離のせいで、カルカッタには多くの難民が流れ込みました。私の母、シヴァーニ・チャクラヴォルティは、そうした難民たちを迎えて彼ら彼女らが住む場所を見つけられるよう助けるために、毎朝早く家を出て近くの駅まで行くのを日課としていました、私が5歳の時のことです。私が大きくなると、母は貧しい寡婦たちに仕事を身につけられるような訓練をほどこす仕事を私にも分担させるようになりました。母はサラア・マースという尼僧院をつくるために奔走して、精神の糧を求める生活を送ろうとする女性たちがそのようにできる場所を作ったのです。こうした女性たちの多くは知識のある人たちで、その後、膨大な数の恵まれない他者たちのために極めて重要な仕事を成し遂げました。私の母はさらに、カルカッタで最初の女性労働者のためのホステルをつくり、それが大成功を収めたので州政府がその秘訣を彼女に聞いたほどでした。母の従妹のひとりが家庭内暴力とジェンダー差別に苦しんでいたのですが、母は彼女をこのホステルの管理人にすることで彼女の才能を開花させるということもありました。このようにして母は多くの人々に可能性を開いたのです。さらに付け加えれば、母が70歳代、80歳代になってアメリカ合州国の市民のひとりとなった時、この新たな国で、1万時間以上もボランティアとしてベトナム戦争からの後遺症に苦しむ兵士たちのために働きもしたのです。

私の母がしたことのはんのいくつかしか紹介できていません。日常生活における母は、いつも陽気で明るい性格の人で、そして同時に無条件に倫理的であることを常に目指していた、そのことをまだ十分に私がお話しできていないと思うからです。

私の父親、ドクター・パレス・チャンドラ・チャクラヴォルティは農村生まれの少年で、英領インドで最年少の民間外科医として将来を嘱望されていたのですが、性暴力事件の裁判で嘘の証言をすることを拒んだがゆえに、そのキャリアを棒に振ってしまいました。この出来事が起きたのは私が生まれる前のことです。私がお父を知る頃には、父は私たちの周囲に住む多くの貧しい人々を癒す聖人のような医者でした。インドの分離独立によって引き起こされた宗教的騒乱の間、ムスリムの人たちを守ったのも父でしたし、父の教えていたムスリムの学生たちがイスラーム側の暴力から父を守ってくれもしたのです。私が11歳の時——父は私が13歳の時に亡くなりました——父が郵便局に連れて行ってくれたことがありました。そこで並ぶ長い人々の列を指さして、父はこう言ったのです。「おまえは私の娘で、しかも階級も上だから、皆がお前を列の先頭に立たせるだろう。でも覚えておいで、いつも列の最後に並ぶのだよ」と。これは1953年のことでした。それ以来自分が前に進む可能性があるたびに、私はこの父の言葉を思い出してきたといっても言い過ぎではありません。

私の両親はジェンダーの違いについても敏感になるよう、私に教えてくれました。私の母は14歳で結婚しました。彼女が学校の最終学年に居た時です。私の父は女性も教育を受けるべきだと考えていただけではありません。もちろんそうした信念を父は抱いていたのですが、重要なことは、子どものような自分の妻が飛びぬけて知性的な人であることを父が理解していたということです。父は母が可能性を伸ばせるようにいつも道を開いておきましたし、1937年に母はたった24歳で修士号を獲得しました。そして母は生涯を終えるまで、独立した知識人として過ごし続けたのです。京都賞を受賞する女性として、私はこう言わなくてはなりません、私の母と私自身にとっての倫理への誘いは、他者への責任として強制されたものではない、と。こうした他人への責任はあらゆる社会においてしばしば女性のジェンダー役割と見なされており、その結果として生み出されたスーパーママたちが子どもと家庭にすべてを捧げることを自らの存在の条件としているのです。

私の考えるところ、こうした両親の姿勢は彼女たちが初期のラマクリシュナ運動に関わっていたことと関係があるように思います。この運動はあらゆる差別主義の体制を変革することを目指しました。階級や人種や宗教の差別、とくに宗教差別はこんにち子どもたちに対する宗教教育がそれほど盛んでなくなったことから、注意をひかなくなっているのですが。他の「新興」国と同様にインドでも、心や頭の筋肉を鍛えて倫理に反応する力を備えさせるという欲望を失ってしまったのではな

いでしょうか。

ラーマクリシュナ(1836年-1886年)は瞑想を日課とする預言者のような人で、1920年、彼の妻が21歳だった私の父親を倫理を重んじる生活へと導き入れたのでした。女性が自らの精神的な導き手であったことが、父にとってジェンダーの正義を重要だと考える助けとなったことは疑いないでしょう。1928年に父は私の母親をスワミ・シヴァンナンダというラーマクリシュナの直系の弟子のひとりに紹介して、それから母の倫理に重きをおく生活が始まりました。シヴァンナンダはジェンダーの平等を日常生活の中で常に考える人で、それが16歳だった母に多くの示唆を与えた話は、私も何度も聞かされました。こうした日常重視の底には極めて深い哲学があることをお分かりになっていただけるのでしょうか。母がしてくれた話を思い出すと私は今でも涙がこぼれてきます。私の書斎の机の上には、老人となったシヴァンナンダの写真が飾ってあります。彼は私の母に次のように言ったそうです。「夫の家で義理の父親と一緒に住んでいるようなところでは、自分で瞑想するような時間はないだろうから、ひとりで大いなる自然の呼びかけに応えなくなったら、ただ両手を合わせて師に感謝を述べるだけでいい、それで十分だよ」と。後ほど、今度は私自身が魂の贈り物について、1960年代に様々な運動に関わっていた別の修道者から聞いた話をします。

さて、私の両親は自分の子どもたちを、先生がキリスト教に帰化した現地の人々から構成される学校に送りましたが、そういう先生たちの多くはいわゆる下層カーストのヒンドゥーでした。私が通った聖ヨハネ教区女学校は、カルカッタで最も古い教会に隣接していて、この教会には町の創設者であるジョブ・チャーノックが埋葬されています。そこの先生たちは、新たに自由を獲得した人たちにふさわしい情熱をもって教育に邁進していました。私は今でもよく言います、教区学校が私をつくったのだ、と。北インドの古い言語で、他の古典言語と同じく壮麗な言葉であるサンスクリット語を教えてくれたのは、そこの教師の一人だったニリマ・パイン先生でしたが、彼女はまさに教育に身も心も捧げる教師のひとりで、この先生のおかげで私は今でもサンスクリット語を研究にも教育にも使うことができているのです。学校で日を過ごすうち、校長のチャルバラ・ダス先生が私の目指すべき模範となりました。彼女の慈愛に満ちた威厳と柔和な厳しさは、とても私などが真似られるものではありませんけれど。倫理に応答しようとする事、その兆しがもし私にもあると皆さんが親切にも認めて下さるならば、それはダス先生がその大切さを私の中に開いてくれたからです。そのことは当時の私は理解できていなかったのですが、次にお話しすることで分かっていただけだと思います。

西ベンガル州で私が土地を持たず文字の読めない人々を教育する教師を訓練する仕事を始めてから30年になります。私自身全く宗教とは縁のない人間で信仰もありません、これについてはまた後ほど触れますが。最近、訓練を受けている村の教

師たち全員が集まる会合があって、私はそこで英語の前置詞について教えたのですが、その時ダス先生の学校でのお祈りを例に使いました——「神よ、我らの前で我らを導き、我らの後ろで我らを戒め、我らの下で我らを支え、我らの上で我らを引き上げ、我らの周りで我らを守りたまえ」といった、たくさん前置詞が出てくるお祈りです。私の学校時代の倫理への呼びかけが違う種類の教えとなって、私の翻訳を通じて、カルカッタのような都会から離れた人たちのために役立ったのですね。望みを捨てずに努めていれば必ず役立つ時がくる、ということではないでしょうか。

ここで申し上げておきたいのは、私の両親が母語を愛していたおかげで、その子どもであった私たち姉妹も、私が倫理的な記号作用と呼んでいるものとのつながりを維持することができたということです。私たちが子どもとして最初に学ぶ言葉には、理性以前の言語がありますが、そのような言語は、意識された頭には感知されない部分の頭脳を動かすものです。つまり、子どもの時の私たちはある言語を発明し、その子どもの親たちはこの言語を「学ぶ」。親は特定の名称がすでについている言語をしゃべっているのです、この子どもの言語はこの名前の付いた言語の中に挿入されていきます。親の話している名前付き言語には、子どもが生まれる前からの歴史があり、また子どもが大人になって死んでもその歴史は続いていきます。子どもがこの名前付き言語を習得していくにつれ、子どもはその言語内部のあらゆるネットワークにアクセスできるようになり、すべての発話と表現の可能性に開かれていきます。そのことを一番よく表している比喩は、コンピュータでもよく使われる「メモリー」というメタファーでしょう。ここで大事なことは、私たちの理性が働き始める前に、私たちの倫理を支える記号作用が存在しているということです。つまり、私たちの最初の言語、私たちの最初の言語使用行為には、すでに意味をつくるという倫理の働きが作用しているのです。私が英語やフランス語、ドイツ語を愛することができるのは、そしてこうして年をとってから中国語や日本語を学習者として愛することができるのは、母語に対する愛情のおかげであること、それは疑いようのない真実です。比較文学の古き良き学生にならって、私は他者の言語を学ぶ時、自分の最初の言語学習を真似しようとしているのです。もちろんそんなことは不可能であると知りながら、ですけれども。

1961年、ニューヨークにやってきた私は、ラーマクリシュナ運動に関わっていた者として、ニューヨークのヴェーダーンタ協会を訪れました。ご存知のようにヴェーダーンタは高度な哲学的思考を必要とするヒンドゥー教の一分野で、私はニューヨークのヴェーダーンタ協会の長をしていた、傑出した指導者スワミ・パヴィトラナンダに出会います。彼はすでに60歳を超えていましたが、厳粛な中にも優しさを秘めた、膨大なヴェーダーンタの知識を持っていた人でした。1963年に21歳の私は、信仰をなくしてしまったと感じていました。このことをこのよ

うにしか言い表せないのですが、きっとこの表現を日本語にするとこうした言い方の不思議さが伝わるだろうか、もしかしたら伝わらないのではないか、そう考えると面白いですね。この日本語翻訳体験をスワミ先生と共有できないのが残念ですけど。

私は彼にこう言いました、「先生、私は信仰をなくしてしまいました」。すると先生は「ガヤトリ、どこに逃げようというんだい？君が集中している研究こそ、君が神聖になる道なのではないかね」と言ったのです。（読むことはテキストに「とりつかれたいとお祈りをする」ようなものだというジャック・デリダの発想を私が理解したのは、このパヴィトラナダの言葉を通じてであることをここで申し述べておきたいと思います。）

私が今「神聖になる道」と翻訳したのは、サンスクリット語の単語「タパスヤ」で、シッダールタ・ゴータマの集中した瞑想を表す言葉です。この瞑想ののち彼は蒙を啓かれた人、すなわちブッダとなりました。私がこの言葉を聞いた時、私は次のような啓示として理解しました。すなわち、人文学を真摯に研究することは人智を超えたものへの直観を得る練習となること、そしてそのような研究は、もし倫理への呼びかけがなされるようなことがあった時に、それに応答する準備ともなりうるのだ、と。1991年に私が受けたもうひとつの精神的贈り物が、こうした理解を私の魂の中に広げてくれました、その出会いについて述べたいと思います。

1985年に私とビマル・クリシュナ・マティラールとの友情が始まります。ビマルはオックスフォード大学の東洋宗教と倫理学のスポールディング教授の地位にあったのですが、彼はデリダの脱構築の哲学に興味を抱いていました。私の方でも、彼と共にサンスクリット語でインド語族の理性的な批判哲学を読むことで多くの利益を得ることができました。この協同学習は1991年に彼が亡くなるまで続きました。最後の会合のひとつで、ビマルはヒンドゥーの行動哲学の中に見出すべき多数の因果論のひとつについて語ってくれました。彼が亡くなってから、私はパリの国立図書館でサタパサブラーマーナの物語を読むことができました。次のような話です。

神の大工であるヴルハスパティがすべての生き物を創ったが、それらはすべて彼から逃げていってしまった。彼は後を追いかけたが、追いつくことができなかった。彼はひどく汗をかいて戻ってきて、その汗が、彼がそこから生き物を創った火の中に滴った。ヒンドゥー教では神々を呼び出すために火を灯します。この火の中に滴った汗が最初の供え物となって人間と煉瓦を創り、それが人間を自然界から文化の中へと導く住居になったというのです。

パリの黄昏の中に立ちながら、私はこの贈り物を亡くなった友から受け取りました。次の日、私はシャルル・マラムードと会う約束があって、彼からも贈り物を受け取ることになります。マラムードはフランスのユダヤ人で、『世界を料理する』

という古代インドに関する驚くべき本を書いていた。私がその時学んだことは、「タパスヤ」とは単に知的労働による変化を通して得られる啓蒙にはとどまらない、ということでした。それはまた「タアパ」にも関係する。「タアパ」とは熱のことで、生きている身体による創造的な手仕事によって作り出される熱のことです。このことを悟った私は、インドにおける最大の選挙民集団でありながら、支配階層の肉体労働に対する蔑みゆえに心理的幽閉状態にある人々に、民主主義のなんたるかを教えようとする試みへと駆りたてられることとなったのです。

パヴィトラナンダから教育という営みに関して私がもらった贈り物は、これにとどまりません。1964年のアメリカ近代言語協会の年次学会で、私は最初の専任教員の仕事をアイオワ大学に得ることができました。私たちはパヴィトラナンダ先生に言いました、「先生、心配です。私はまだ22歳で、インドを出てから3年にしかありません。大学院生も教えることになってしまいました。フランスの詩人ボードレール、ドイツの詩人リルケ、それにアイルランドの詩人イェーツの大学院でのセミナーを引き継いだからです。怖いのです」。「ガヤトリ」と、先生は言いました、「君は生活のために教える、お金のために。ということは、あなたが自分の学生たちに仕えるということだよ。召使いが主人の子どもたちを叱って、子どもに義務を果たさせるのを見たことがないかい？忘れてはいけないよ、あなたが学生のサーバントだということを。もし自分が偉大な先生、グールーだと思いはじめたら、すべておしまいだ」。彼が例としてあげていたのはもちろん家庭の召使いのことだったのですが、その慣習も現在では幸いなことにほとんど消滅しています。それでもこの比喻を通した教えは、私の心に深く沁みわたりました。コロンビア大学でもベンガルの農村学校でも、私がこのことを忘れたことは一日もありません。

1967年に、全くの偶然で私は、(自分にとっては)無名の著者の本をカタログから注文しました。そして少しずつ、私の仕事はこの著者の哲学のかたちに出会っていきます。その本は『グラマトロジーについて』で、著者の名はジャック・デリダでした。

2度の結婚と離婚をした私は、1986年にジェンダーの泥沼から脱出した思いでした。その時私が感じていたのは、自分に下から学ぶ用意ができたということでした。周りを見回してみると、英雄的な医療活動をしていたザフルラ・チョウドーリがいて、彼が私をバングラデシュの農村で救急医療活動をしている女性に紹介してくれたのです。彼は私を田舎の貧しい人々を教えるために派遣し、僻地の夜学校へと送ってくれました。さらに、ララン・シャー・ファキールという19世紀の草の根神学者及び唱歌の作曲者として驚くべき深さと才能を持った人が創った神学校があるのですが、70年代からの友人であった詩人のファハド・マツァールが、そこで働いている人たちに私を紹介してくれたのです。ファハドの同志で私生活のパートナーでもあるファリーダ・アクターは、疲れを知らずグローバルに活躍して

いるフェミニスト活動家ですが、彼女がこうした活動に私を引き込んでくれたのです。彼女のリーダーシップの下で、私は1994年のカイロでの国連人口開発会議に参加しました。この会議は、国連が最初にNGOに門戸を開いた会議として有名ですね。この会議では、地球の北と南との断絶が顕著でしたが、私はそこで倫理的なものを実現するには上からの計画では決して近道にならないこと、そして、貧しい人々に自分自身の利益に基づいて何かを教えようとするのが極めて問題であるということを感じました。このことでファリダにはいくら感謝しても足りないと思っています。

ファハドが最近、ラランの活動について深く考えるようになったのは私のおかげだと言ってくれました。でも私の方ではラランはファハドからの私への贈り物と思っているのです。ラランのお墓のそばで彼の弟子たちに話をしながら、私は脱構築の豊かさを見出しています。こうしたお弟子さんたちは制度としての教育を受けてきたわけではありませんから、私にとって他者の空間の中で責任を保持しながら自分を棚上げにする、これもまた新たな訓練の機会となるのです。それはまさにあらゆることの基本にある、倫理への呼びかけがやってきた時にそれに応答する訓練であり、パヴィトラナンダ先生が言う意味での、人文学教育がおそらく目指すことのできる訓練なのだと思います。

以下はラランの弟子たちがどのように自己を表明しているかの例です。これは仲間のひとりのお葬式への招待状の一部として、ファハドが英語で書いたものです。

人々をその違いや多様性のもとに結び合わせる倫理や政治上の条件を作り出すためには、社会の中核から排除されその権利を奪われている「サバルタン」や「アウトカスト」と呼ばれる人たちを目覚めさせることが必要である、これこそ（最近亡くなった）彼が思っていたことだ。この観点から彼は、カースト制度と階級差別と家父長主義に反対する運動が、バングラデシュの民衆を主体とするボークティ運動には重要だと主張していた。ボークティ運動を単なる芸術運動として脱政治化してしまうことは、その倫理や政治上の重要性を否定することになる。こうした彼の遺産を引き継がなければ、ラランが残した知を再興するための地盤形成もできないだろう。このように社会的に排除された人たちを動員することは、何百年も続いてきた伝統のなかで育ってきた調和と責任あるライフスタイルを実践する賢い人々を糾合することなのである。

まず申し上げておきたいことは、ララン・シャーがイスラームとヒンドゥーという、東インドの二つの伝統的に対抗関係にある宗教を、双方の倫理や政治の要素を合わせることで融合させたということです。第二に、この亡くなった弟子について語る言葉の最初の行で述べられている「サバルタン」について少しお話ししたいと思います。

「サバルタン」とは、私たちがアントニオ・グラムシから学んできた用語です。

軍隊用語として「サバルタン」が命令を受け取るだけの兵士という意味であることから発想したグラムシは、この語を国家や共同体から切り離された人々を指すために使いました。

最後に「ボークティ」という単語ですが、これが「カースト制度と階級差別と家父長主義に反対する運動」という文脈で使われていますね。私の以下の説明は専門家のそれではないのですが、少しだけお話ししておきましょう。

「ボークティ」は広範な全インド的運動です。ララン・シャーの活動も16世紀に始まった東インドの運動に掉さすものです。「バークティ」という単語はサンスクリット語の語源「バージ」から来ていて、その語のもとの意味は「分ける」と同時に「共有する」ということです。つまりこの性質はフランス語の「パルタージュ＝分有」と共通しています。脱構築の哲学者たちも、この「分割しながら共有する、共有するために分ける」という特性について様々に語っています。

驚かれるかもしれませんが、このフランス語とサンスクリット語の結びつきの「正しさ」を私が発見したのは、実は私がこの講演の原稿を皆さんのために、つまり私が知的な応答責任を担っている聴衆の方々のために書いている時だったのです。もちろん私は「バージ」が「分ける」という意味であることを知っていたので、私の「ボークティ」の理解もそれをもとにしていたのでした。でもこの講演原稿を書きながら、私はサンスクリット・英語辞書を見てみたのです。そうしたら「バージ」の最初の意味は「分ける」となっていた。16世紀ヨーロッパの宗教改革のモデルに従って、「バークティ」運動は一般に直接的な献身であると説明されており、私もこの語について書く30分前までは、「ボークティ」が自分を分割し、伝統に従って、ある特定の役割を果たすことに過ぎないと考えていたのです。それはちょうど偉大な役者がお金のためだけでなく自らの役を力強く演じるように、決してあきらめることなく日常の自分からはみだしたものと特別な関係を取り結ぶことのようなものです。こうした私の発想はララン・シャーの弟子たちが心から受け入れてきたことでもあったわけで、なぜなら彼らは辞書の助けも、学問的な定義や人口に膾炙した説明もなしに、そのことを知って考えることができていたからです。私自身がこうした思考に迫れるのは、人文学徒として演劇の重要性を知っているからです。これこそ私が先ほど触れた脱構築の豊かさではないでしょうか。皆さんのおかげでこのような豊かさをさらに確かなものにできたわけです。

やや抽象的になりすぎたかもしれません。子ども時代の話に戻しましょう。

私が子どもの頃、私は家にいた使用人の子どもたちに文字を「教える」のが好きでした。彼女たちをいわば自然に教え子に見立てて、まさしく子どもらしい関係を築いていたのです。この習慣は大人になっても私から消えませんでした。このようなまさに地べたの上での強制されない教育の試みの一つの結果が、私の故郷の西ベンガルでの活動です。プルリアという「遅れた」地域を私が訪れるたびに、その

活動家が部族の子どもたちのために小学校を開いてくれないかという計画を持ちかけたのです。私は最初ためらっていたのですが、いったん動き出すと、そこから離れることができなくなりました。私はその時には気付かなかったのですが、ムソリーニによって投獄され、47歳の時に牢獄で生涯を閉じたアントニオ・グラムシの仕事が、こうした教育の仕事と共鳴するようになってきました。これら部族民たちの環境について学ぶことに興味を持っていた私は、彼ら彼女らが民主主義についてほとんど何も考える機会がないまま、世界最大の民主主義国家であるインドで投票権を持っていることが引|っかかっていたのです。当時はまだ意識していませんでしたが、これがいずれ私にとって、「前衛主義の見直し、先に立つ者を補う運動」と私が呼ぶようになったプロジェクトにつながっていきました。牢獄のグラムシが構想したのは、マルクスによる社会正義への取り組みが認識論的なものである(言い換えれば、それは知の対象をどう構築するかの方法を変えることである)ということを理解することと同じ道筋にある活動だったのです。私が社会正義について考え始めたのは15歳の時で、カール・マルクスの仕事と関係していましたが、グラムシへの方向性を持ったこうした西ベンガル州の農村学校での仕事は私にとって、とても重大な倫理的性格を持っていました。民主主義とは、結局のところ、倫理に関わる困難な政治的力学の賜物です。また私のこの仕事は、アフリカ系アメリカ人の教育者W. E. B. デュボイスに対する私の関心ともつながりながら、この時期に表に出てきました。すなわちデュボイスの考え方の中で、貧しい人々は施しを単に受け取る受益者であるよりは、倫理の主体として自律しているという発想が、私の心に響くようになったのです。

最初から私は、これらの学校について先入見なしで臨もうとしました。土地を持たない文字も知らない人々、いわゆる部族民とか「アンタッチャブル」(彼ら彼女らは憲法では生存を保証されていますが、特権のある人々から見れば、いまだにそうではありません)とか呼ばれる人たちは、カースト制度に起因する差別によって、その認識力そのものを損なわれてきました。ここでこそ、私の「タパスヤ」理解、すなわちそれが知的な啓蒙であると共に身体の啓示でもあるという考え方が役に立ちます。農村の生活では、教師でも学生でも肉体労働という概念が大きな関心を引きます。特に私が、彼ら彼女らに許されてこなかったのは知的労働への権利であると指摘すると、皆が心を動かされるのです。知識に基づくような労働は、上流階級や上層カーストの人たちだけに許された営みだと考えられてきたのですから。こうして肉体労働さえも彼らには苦痛をもたらすものでしかありませんでした。こういったことが、この人たちにはすぐさま自分に即した主題として響いたのです。こうして日々が過ぎてゆき、私は西ベンガル州とアメリカ合州国とを往復する生活を続けてきたのですが、やがて私は、全く逆の極において、アメリカ合州国の学生たちも知的労働の権利を奪われているのではないかと考えるようになりました。なぜ

なら彼ら彼女らはインターネットによる検索エンジンの機能に頼り、卒業後の雇用と収入にしか焦点をおかない学習態度にどっぷりと浸かっているからです。私自身はこうした最新のテクノロジーを嫌悪するわけではありません。それでも私はデジタル技術が毒にもなれば薬にもなると信じており、それが生産的に癒しのために建設的に使われるとすれば、それは唯一、人文学の遅い速度で訓練された頭脳と心によると考えているのです。

1997年に親友のロア・メツガーが亡くなりました。死に際に彼女は私に魂の贈り物をしてくれました。最後に会った時、私たちは一晩じゅう語り明かしました。私は彼女に、何があなたにとって今でも大事なの、と聞きました。死を前にした大きな苦痛に打ち勝つように彼女は明るく、そして何の躊躇いもなく、「教えることね」と答えたのです。以前、彼女には私の農村学校のことを話したことがありました、アトランタの彼女の研究室で、長い一人語りで。彼女は一度として口を挟もうとはしませんでした。ですから彼女が私に形のある贈り物、1万ドルを遺してくれた時、私は心を揺さぶられても驚きはしませんでした。そのお金で私は両親、パレス・チャンドラと シヴァーニ・チャクラヴォルティの名前で記念農村教育基金を創設することができました。そして今回いただいた賞金もこの基金に大きく役立てることができます。自分自身の経験から学ぼうとしてきた教えにふさわしい教育者を、一人でも二人でも育てることができれば——心からそう思います。心も体も、あらゆる意味で優れた質を併せ持った教育のできる人が育ってくれることを望んでいます。

ここで、私の妹であるマイトレイ・チャンドラ教授からの魂の贈り物にも触れておくべきでしょう。今回彼女をお招きいただいて本当にありがとうございました。彼女は教育に関する極めて高度なレベルの活動に従事しており、とくにインド政府に委託されて女の子のための技術教育や中等学校における環境教育に携わってきました。その仕事は非常に多くの人に影響を与え、それに比べれば私の仕事などはせいぜい数百人の関心と呼んでいるにすぎません。彼女は自分の経験からする私への励ましが、どれほど私にとって大切かを知っている人です。つまり私のしているようなテキスト読解の仕事が、国家によってなされるもっと大規模な構造をつくる仕事を支えるのに必要かを、彼女は自らの経験から知っているのです。

ここで、倫理にとって訓練がいったいどんな物質的な意味を持っているかを考えてみましょう。自分が死ぬ前に私が理解したいことがあるとすれば(すべてを理解するなんてことは不可能ですから)、それは「善良な」金持ちが世界の問題を解決することの必要性を何とか回避できないかという問題です。「善良な」金持ちはこのことを成し遂げるためのお金を得るのに、悪者に頼らざるを得ない。そして「善良な」金持ちのお金は、だいたいにおいて悪い金持ちのところに戻っていく。乞食もある程度はそこから物質的利益を受けるのですが、乞食は乞食のままです。私の

仕事は問題を解決する人を創り出すことであって、問題を解決することではありません。そのために私は教師を教え続けていきますし、彼ら彼女らが今も将来も献身と集中をもって教えることができるように、「善良な」金持ちをつくる学校(コロンビア大学)と、乞食をつくる学校(西ベンガル州のビルバムという田舎にある名前のない7つの学校)でこれからも活動していきます。(ちなみに、西ベンガルのこうした学校での活動には通訳が欠かせません。インドは多言語国家で、私の母語はベンガル語ですから)。私が理解しなくてはならないのは、彼ら彼女らの欲望です(必要ではなく)。そして理解と愛をもって、私は彼ら彼女らを変えていくことができるよう努めなくてはなりません。それこそが人間に関わる学問の教育というものではないでしょうか。

つまり私の仕事は、自らの間違いから学びながら、民主主義を知覚する営みを教える方法を育てることです——自律と他者の権利との間の綱引きと言ってもいいでしょう。「民主主義」とは論争の尽きない言葉で、私のこの原稿を読んだある友人は、私がこの語を作り変えていると言いました。つまり、社会の上層にいる人々にとっては、市民が基本として享受している自由があることによって保証されている知識人の自律した批判的思考の習慣、つまり表現の自由ですね、それがあつた。同時に、民主主義は建設的な自己批判によって表現の自由を制限すべきだ、という考え方です。それに対して、社会の下層にいる人々にとっては、ひとりでも何らかの民主主義的な判断に近いものができるようになれば、そこに希望が生まれる。それは、あらゆる方面からなされている抑圧に対して自分の利益を守るといふ正当な営みとも、先に立つ者の指導力とも全く違ふものです。

いま述べたことを解きほぐしてみましよう。

間違いから学ぶこと。大きな過ちは、平等が同一であることを意味すると考えることです。私は都会に住む中産階級の教育のある両親のもとで育ち、皆様にお伝えしてきたような魂の糧となる贈り物をたくさんもらったおかげで、様々な先入観や癖を身に着けています。そうした習慣や観念の集合が私たちの学習のための手段なのですが、それは何千年も抑圧され、特に自らの心と頭を使うことに関して自由が許されてこなかった人々の手段と同じではありません。

具体的な例を挙げましよう。

2000年にバングラデシュで開かれた生物多様性フェスティバルで、クリス・レワという若いベルギーの女性に出会いました。私たちは編垣で囲まれた茅葺の小屋の玄関先に座っていました。私が聞いていたのは、何人かの農村女性たちの嘆きです、マイクロクレジットという小口の貸付金のおかげでいったい彼女たちがどんな禍いにあつているかについての。素敵な冬の太陽の中で腰を下ろしながら、クリスが私に語つたのは、ベルギーの都会での仕事(たぶん多国籍NGOのような仕事でしょう)に彼女がいかに失望しているかということでした。そこで彼女が次に

言ったことは、今になって私には分かるのですが、私がそれより数年前に考えていたことと同じ、つまり彼女なりの旅の始まりに当たったの思いだったのです。彼女も私も、平等は同じであることではないと理解するようになっていたからです。「ガヤトリ」と彼女はその時私に言いました、「自分の堅苦しい仕事をやめて、世界の貧しい人たちと一緒にいたかったの。これまで私はこの人たちもベルギーの人たちと同じだと思っていた、もっとずっと貧しいけれど。でも今は…」と。

どうして私はその時が彼女にとっての旅の始まりだったのだ、と今になって分かるのでしょうか？

今年2012年の9月14日に、私はコロンビア大学で、ビルマの少数ムスリムであるロヒンギの人たちがすさまじい弾圧の犠牲になっている事実に人々の関心を向けようと、大規模な会議を開きました。ビルマはミャンマーとも呼ばれていますが、そこでは民主化が進行していると言われながら、このような民族弾圧が起きているのです。そして、この問題に関心を寄せる人々が尊敬する一人として、クリス・レワの名前を知らない人はありません。彼女は平等とは同じであることではないと理解したのです。自分自身を他者の中で、他者のために棚上げにしておくことを学んだのです。

世界の貧しい人たちがベルギー人ではないように、ビルバム村の土地を持たず文字の書けない人々は、都会に住むカルカッタの人たちではありません、彼ら彼女らは土地もなく文字も書けないのですから。こうした人たちが知識を得るのに使っている心や頭の特異な仕組みを学ぶことから始めなくてはならない、このことを私が理解するのに数年かかりました。そしていま私が彼ら彼女らを教えるとするなら、この人たちが使っているこの特別な手段を彼ら彼女らが使いこなせるように助ける方法を、私は学ばなくてはならないのです、何か普遍的に存在する頭脳とかではなくて。私は今でも学んでいる最中ですし、失敗もします、でも諦めることはありません。

それでもこの人たちは選挙に行きます。そしてそのことは普遍的な現象とは言わないまでも、一般的な議論の範疇にあります。私はインド市民であり、一人一票の状況では、私も彼ら彼女らと平等です、しかし同じではありません。ですから、私が教え訓練している先生や子どもたちは、もともと才能がないのではなく(これが上層階級の見方ですが)、歴史によってその才能を伸ばせなくされてきたのです。私は彼ら彼女らに知識を教えるだけでなく、この人たちが正しく投票できるように民主主義的思考の癖をつけようとしています。これらサバルタン階級は国家を使うことができていません。民主主義においては、人々の方が国家をコントロールするというのが原則です。私のささやかな、失敗ばかりの、それでも執拗な努力に名前を付けるとすれば、それはサバルタンに市民意識を回復しようとする、こと、と言えるかもしれません。ベトナム戦争に従軍した兵士たちをアメリカ合州国の市民と

して蘇生させようとした私の母の試み、私が思うのはそのことです。

市民意識や市民権はしかし、民主主義のなかで自己の利益を守ることと普通考えられていますね、自律という意味で。もし他者の利益を第一に考える倫理を重んじる教育が伴わなければ、こうした自律の試みも、現在の世界を支配する商業や金融の営みによってたちまち飲みこまれてしまうことでしょう。そうした経済活動は差異によって、異なる国々の異なる貨幣価値によって、富める者と貧しい者との違いによって、金融資本を肥え太らせていくのですから。

私たちはこの民主主義が持っている他者の利益を第一に考えるという側面を、サバルタンの側からも理解しなくてはなりません。

私自身のインド人としての経験から申し上げますと、私がかつて民主主義の最高のモデルとして考えていたのは、インドの古典音楽です。そこでは自分で選んだ構造を縛る規則の中に、創造の自由が息づいていますから。私の同僚であるヤン・エルスターによれば、彼が自分のヨーロッパ人としての経験から引き出した最良の心と頭の仕組みは、ホメロスの『オデュッセイア』のなかにある民主主義だそうです。その中で主人公オデュッセウス(ユリシーズ)は、船員たちの耳に栓をつめさせ、自分の体はマストに縛りつけさせて、自らはサイレンの魔法の歌を聴きながらも、誘惑に負けて船を島に近づけ難破させることがないようにした、という話ですね。

でも私たちの発想は共に上層階級の、一番上の方の考え方でした。古典音楽を作るには、大変な訓練が必要です。またオデュッセウスは船員に命令して自分の体を縛り付けさせる必要がありました。これらはどちらも自己抑制としての民主主義の例です。私が先ほど述べた、建設的な自己批判による表現の自由の制約としての民主主義というのはこのことです。しかし、ジェンダーや階級によって強制的な制約を受けてきた人たちはどうなるのでしょうか？私がお送りした要約にはこう書かれています——民主的な判断に近い何かを育てること、一番下にいる人たちのための模範として、と。

農村の子どもにとって民主的な判断を育てる練習は、学習と試験に受かることを区別することにあります。バングサピ居住区のメフナド・シャバルが2006年にこのことを私に教えてくれました。いま世界でよく使われている「人間開発指数」は量しか問題にしていませんね。何年学校に通ったか、といった。私たちは自分の子どもたちのためにいろいろな学校を見て回って、どこが一番いいかと考えますでしょうか？メフナドは部族出身の10代の若者で、両親は土地を持たない文字も書けない人たちですが、彼は地域の農園所有者のための統計の一つにはなりたくなかったのです。彼は部族出身の子どもとして初めて州の中学校試験で一番の成績を取めました。彼が望んでいたのはどんな条件にも制約されない基準に従って教育を受けることだったのです。サバルタンにとって民主主義とは恐ろしいものです。土地所有者が学校を閉鎖してしまったことがあります。20年間の努力が水の泡に

なってしまったのです。もう一度最初から、と私は自分に言い聞かせました。ビルバム村はプルリアほど封建的ではないのですから。

こうしたサバルタンの子どもたちの間では、一番上と底との二極分裂はなくなりつつあります。子どもたちの心と頭は水を含んだセメントのように柔らかい。私たちが彼ら彼女らに刻みこんでいるのは、互いに矛盾した習慣です。競争はなし、でも自分をより磨こうとする努力は無条件に認められる。学校の勉強は楽しくていい、でも主流の社会に入れるように自分を鍛えよう。人を指導する傾向は勧められないが、権威に対して疑問を持つことは推奨する。何事も上からのお説教では決めない、すべては教室内の投票で決める。ジェンダーのバランスを図る、でも既存のジェンダー差別を掘り崩すために女の子を優先する。カントに従って言えば、人間としての自由、主体としての平等、市民としての自律。でも忘れてならないことは、現代の情報科学がそうであるように、人間的な意味は接近不可能な心理的メカニズム内部の意味のない断片から作られることもある、ということです。子どもたちの中に望ましい習慣を作り出すのはとんでもなく難しい。子どもという主体と教師という主体のなかに、分別のない服従を育ててしまうのではなく、平等だけれども同じではない、という関係を養うということは。

一番地位の低い法の番人、すなわち田舎の警官はサバルタン階級に属していることが多いのです。こうした法の番人たちが腐敗して性暴力や賄賂を当然とする文化を内面に宿している。こうした人たちも階級差別のない社会を目指す私たちの息の長い仕事の中にももちろん含まれています。

詩人アドリエヌ・リッチが、私の京都賞への応答を代弁してくれているように思います。彼女はこう言っています、「私たちが自分自身の中に聞かなくてはならない、他者の様々な声を思い出すこと」、その努力が必要なのだ、と。この言葉に従って、私もいくつもの声をここに呼び寄せたいと思います、その名をあげることによって。有名な人の名は省きますが、彼ら彼女ら、すべての名によって、この賞を受け取るために——シヴァーニ・チャクラヴォルティ、パレス・チャンドラ・チャクラヴォルティ、ニリマ・パイン、チャルバラ・ダス、スワニ・パヴィトラナンダ、ザフルラ・チョウドーリ、ファリーダ・アクター、ファハド・マツァール、プラシャンタ・ラクシット、ロア・メツガー、ロシャン・ファキール、マイトレイ・チャンドラ、メフナド・シャバル。彼女たちに代わって、皆様に心より感謝申し上げます。

(訳：本橋哲也)